

「Kita Alps Traverse Route」ならではの

体験ストーリー集

—山岳エリア編—



2025 年 3 月

中部山岳国立公園管理事務所

目次

I. 「Kita Alps Traverse Route」ならではの体験ストーリー集の使い方	1
II. 山岳エリアの望ましい体験	4
III. 山岳エリアならではの体験ストーリー	5
1. 山岳エリアならではの価値・魅力 1	
「日本を代表する傑出した山岳景観とその成り立ち」	6
槍・穂高連峰は標高 3,190mの奥穂高岳を最高峰に、槍ヶ岳、南岳、涸沢岳等 3,000m級の山々が連なる日本を代表する山岳地域であり、稜線からは圧巻のパノラマ景観を望むことが出来る。 また、涸沢の圏谷（カール）や槍沢の U 字谷等の氷河地形が随所で見られ、迫力のある岩峰や雪渓、高山植物群落等があいまって季節ごとに優れた山岳景観を呈している。また、ライチョウ、カモシカ等をはじめ野生動物も豊富にみられる。 息を飲むような圧倒的な眺望、ライチョウや高山植物との出会いなどは、登山を経なければ味わうことのできない体験である。さらに、造山から氷河による浸食まで、その風景の成り立ちを知ることで、ダイナミックな大地の営みを感じることができる。	
2. 山岳エリアならではの価値・魅力 2「近代登山発祥の地～アルピニストの聖地～」 ...	12
江戸時代には播隆上人が笠ヶ岳再興、槍ヶ岳開山を行うなど、山岳信仰の対象とされるとともに、豊かな木材を切り出すために杣人が山深くまで分け入っていた。 明治時代にはW.ガウランドにより飛騨山脈がジャパニーズ・アルプス（日本アルプス）と名付けられ、W.ウェストンにより広く世界に紹介され、日本の近代登山の幕開けとなった。 山岳エリアでは登山を楽しむとともに、山岳信仰やレジャー登山の歴史、自然と密接に関わってきた暮らしなどを知ることで、日本人が山とともに共生してきたことで享受してきた喜びや恵みに触れることもできる。	
3. 山岳エリアならではの価値・魅力 3「登山文化を支える山小屋」	17
日本を代表する傑出した山岳景観を要する本地域は国内トップクラスの人気を誇る本格的な登山エリアとなっている。 本地域は世界でも有数の山小屋が密集する地域と言われており、山頂付近や稜線部などの奥深い山域にも数多くの山小屋が存在している。また、本山域には多様な登山ルートが整備されており、全国から多くの登山者が訪れている。 山小屋は、厳しい自然環境下で制約の多い中、登山者に宿泊や食事といったサービスを提供することに加え、登山道の維持作業、登山者への情報提供・指導、遭難救助、トイレや水の提供など、山岳地の環境保全と安全登山を支える上で重要な役割を果たしている。	

はじめに

令和3（2021）年から中部山岳国立公園南部地域を中心に、松本市街地と高山市街地をつなぐ行政区分にとらわれない横断的な地域を一つの観光圏として捉え、多彩で上質な体験と滞在ができる魅力的な観光地へと磨き上げていく「松本高山 Big Bridge 構想」実現プロジェクトを進めています。利用と保全の好循環による持続的な観光として構想を実現するための総合循環型観光圏を「Kita Alps Traverse Route」と名付け、一体的な旅づくりとプロモーションの取組を進めているところです。

「Kita Alps Traverse Route」には、構成する地域ごとに自然・文化等の特徴的な魅力があります。こうした特徴的な魅力が、この観光圏の来訪者へ、この地域ならではの体験として提供されることで、魅力が価値として伝わり、来訪者との土地に特別なつながりが生まれ（満足度が向上しファンが拡大し）、この地に訪れる価値・滞在価値がさらに向上し（地域のブランド化が進み）、選ばれる観光圏が確立され、社会の充実や自然・文化等地域資源の保全につながる総合循環型観光圏の実現に至ると考えています。

本冊子『「Kita Alps Traverse Route」ならではの体験ストーリー集』 - 山岳エリア編 - は、「Kita Alps Traverse Route」の山岳エリアの特徴的な自然・文化とそこで得られる体験を選び出し、その資源や体験の持つ魅力を価値として来訪者に「わかりやすく」、「共感できる形で」伝えられるよう、短いストーリーと解説をつけてカード形式で整理をしたストーリー集です。

来訪者がこのエリアで滞在する中で、宿やお店、バスの乗り換え場所、ビジターセンター・案内所、歩道や展望地などで、多岐にわたる利用サービスが提供されます。本冊子が、このエリアで利用サービスを提供するすべての関係者による、このエリアならではの旅づくりと旅の提供につながり、来訪者とのエリアとの特別なつながりを強くしていくことに活用されることを期待しています。

I. 「Kita Alps Traverse Route」ならではの体験ストーリー集の使い方

「Kita Alps Traverse Route」ならではの体験ストーリー集（以下「ストーリー集」）は、中部山岳国立公園南部地域の8つのエリア（上高地、山岳エリア、乗鞍高原、乗鞍岳、白骨温泉、新穂高温泉、平湯温泉、沢渡）ごとに特徴的な自然・文化とそこで得られる体験を選び出し、その資源や体験の持つ魅力を価値として来訪者に伝わりやすく短いストーリーと解説をつけてカード形式で整理をしたものです。

来訪者の方々に「Kita Alps Traverse Route」の価値に触れ、内面の変化を得てもらうことを目指し、ガイド事業者や旅行会社の方、各拠点の拠点施設や宿泊施設、飲食店、土産物店等でお客様と直接接する方、メディアの方等に活用いただくことを想定しています。

なお、本ストーリー集は、令和6年度時点に収集した情報をもとにまとめたもので、今後、内容面のさらなる充実、ターゲットやテーマに応じた磨き上げなど、計画策定後も活用をとおしてブラッシュアップを重ねていければと考えています。皆様も活用を通じてお気づきのことがあれば、ぜひ環境省中部山岳国立公園管理事務所までご意見をお寄せください。また、他のエリアのストーリー集をご覧になりたい場合も環境省中部山岳国立公園管理事務所までご連絡ください。

<ストーリー集の活用イメージ>

○ガイド事業者、旅行会社の方 **地域の価値を伝える**

- ・本ストーリー集を参考に、これまで以上に「ここでしかできない体験」を提供するプログラム・ツアーを造成する。
- ・本ストーリー集掲載のカードを使って、ツアーの最後にツアー中に触れられなかった価値についても情報提供する、あるいは同じエリアの別のテーマを取り上げたツアー商品等を紹介することで、来訪者に次回訪問のきっかけを与える。

○観光協会やビジターセンター等の拠点施設でお客様と接する方 **地域の価値を伝える**

- ・本ストーリー集を参考に、これまで以上に「ここでしかできない体験」を意識して、来訪者に対して情報提供を行う。
- ・中部山岳国立公園南部地域内の拠点間の違いとつながりを説明することで、来訪者に対して「Kita Alps Traverse Route」の価値を紹介する。

○宿泊施設や飲食店、土産物店等でお客様と接する方 **地域の価値を伝える**

- ・自身の宿や店で提供する商品等について、本ストーリー集を参考にストーリーをもって説明、販売することで、「ここならではの価値」のある商品として来訪者の購買意欲を高める。
- ・自身の宿や店で利用者から地域や商品等について質問を受けた際、本ストーリー集を参考に「ここならではの価値」を紹介する。
- ・本ストーリー集掲載のカードの内容をそのまま伝えるだけでなく、地元で働く人ならではの視点を盛り込みながら、適宜アレンジして伝えることで、「ここでしかできない体験」を提供する。

○メディアの方 **地域の価値を伝える**

- ・本ストーリー集を参考に「ここならではの価値」を全国・世界へ発信する。
- ・本ストーリー集を活用した取組を進めている行政関係者や観光協会事務局等に取材をすることで、中部山岳国立公園南部地域における「松本高山 Big Bridge 構想」の実現に向けた動きを発信する。

本ストーリー集の構成は以下の図のとおりです。

「望ましい体験」は、このエリアの特徴的な自然・文化等の魅力に触れ、このエリアだからこそ体験しておくべき、このエリアならではの体験を、想定する旅行者像ごとに整理したものです。このエリアならではの体験ごとにストーリーと資源の解説がまとめられた「カード」が、このエリアを特徴づける資源の種類に応じた「カテゴリー」で分けられ整理されています。

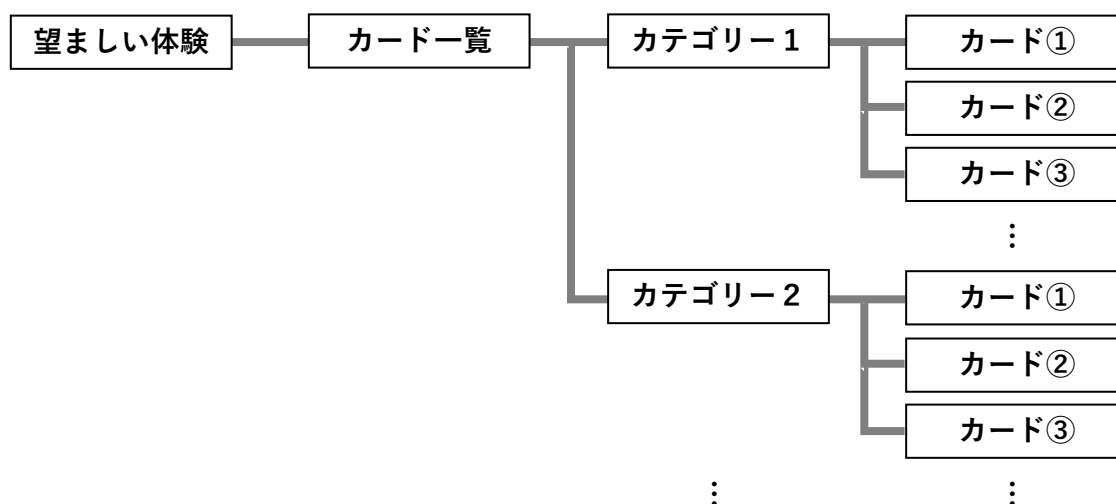


図 ストーリー集の構成

「カード一覧」には、各カードの体験を4つに分けた「ジャンル」と、旅の趣向により6つに分けた「旅行者分類」との対応を整理しています(各類型の定義はカード一覧の凡例をご覧ください)。

ジャンルや旅行者分類は、旅行のテーマやターゲットにあわせて、カードに示した体験や資源のストーリーを組み合わせる旅づくりを考える際の参考として活用することを想定しています。

カテゴリー	番号	カード	ジャンル	旅行者分類					
				ST	RV	WB	ET	FR	SI
その出た日本を代表する傑出した山岳景観と成り立ち	1-①	地質から見る槍穂高の生い立ち	NE				●		●
	1-②	氷河が削り出した槍ヶ岳、穂高岳の雄姿	NE				●		●
	1-③	標高差がもたらす植生の垂直変化	NE				●		●
	1-④	積雪深の影響を強く受ける高山植物	NE				●		●
	1-⑤	魅惑の高山蝶	NE				●		●
ト地近 のく代 聖アル登 地ル山 ピ発 ニ祥	2-①	播隆上人による槍ヶ岳開山	CA				●		
	2-②	仙人、獵師であり山案内人であった上條嘉門次	CA				●		
	2-③	近代登山の黎明 W.ガウランドとW.ウェストン	SA				●		●

図 カード一覧の例

各カードの構成は以下のとおりです。

カード名は、ここならではの価値やストーリーを感じられる資源や体験、背景となる情報を一言で表すタイトルとなっています。

説明文やイラストは、他のエリアや他地域の資源との違い、ここならではの価値やストーリーを表現するように留意して作成しています。

イラストの下部には、説明文の補足として、説明文に出てくる用語の解説や、説明文で紹介した価値やストーリーを実際に体験できる場所・方法等の紹介をしています。説明文のみで足りると判断したものは空欄の場合もあります。

山岳エリアならではの価値・魅力 1 日本を代表する傑出した山岳景観とその成り立ち

1-①：地質から見る槍穂高の生い立ち

槍穂高連峰の山々は、出来た年代や出来方により大まかには以下4つのステージに分けられる。

【ステージ①約1億5000万年前～】土台をなす砂岩・泥岩などの堆積物：蝶ヶ岳から徳本峠周辺

【ステージ②約6400万年前～】常念岳・燕岳や屏風岩をつくる花崗岩

【ステージ③約176万年前～】槍穂高連峰をつくる火山岩

【ステージ④約12万年前～】現役活動中の焼岳火山群

これらの地質の違いは、例えば山並みを遠望することや登山道の色や岩石などの観察からうかがい知ることが出来る。特に、槍穂高連峰は世界的に見ても非常に新しい山脈であり、その形成過程の証拠を豊富に観察できることが大きな特徴である。槍穂高は約176万年前のカルデラ火山によってその原形が形成された。この噴火の際に噴出した火山灰等は堆積して「溶結凝灰岩」となり、地中に残ったマグマは冷えて固まり「滝谷花崗閃緑岩」となった。その後、東西に圧縮された力が働くようになり、東に傾きながら隆起していく。現在の槍の穂先が東に傾いているのはこの隆起が要因である。

また、この隆起は地下深くにあった「滝谷花崗閃緑岩」を露出させた。滝谷花崗閃緑岩は世界で最も若い花崗岩（通称：花崗岩ベイビー）の一つであり、槍穂高連峰の急速な隆起を示す証拠でもある。



東に傾く槍の穂先 槍ヶ岳の先端は東に20度ほど傾いてお辞儀をしたようになっている。これは北アルプスが急速に上昇した際に信州側に傾いて隆起した傾動運動を示すものである。

西穂高岳稜線で見える地質の変化 新穂高ロープウェイ山頂駅にて西穂高岳から丸山への稜線の連なりを見ると、西穂高岳から独標付近まではギザギザの険しい岩稜で、そこから丸山まではなだらかな地形になっていることが分かる。これは岩石の違いによるもので、険しい岩稜が「溶結凝灰岩」からなる地形、なだらかな山稜が「滝谷花崗閃緑岩」からなる地形である。

● ● カテゴリー名

● ● カード名

ここならではの価値、
ストーリーを伝える
説明文

● ● ここならではの価値を
表現したイメージした
イラスト

説明文の補足
(用語の解説、
価値やストーリーを
実際に体験できる場所・
方法等の紹介)

図 カードの例

Ⅱ．山岳エリアの望ましい体験

想定する旅行者像ごとに、山岳エリアの特徴的な自然・文化等の魅力に触れ、山岳エリアだからこそ体験しておくべき、山岳エリアならではのオススメの体験は以下のとおりです。

<登山者>

- 登山を経なければ味わうことのできない圧倒的な景観に心うたれる。
- 自らの力で歩き 3,000m の頂きに到達することで、他では得られない達成感に浸る。
- 森林限界を越えた眺めの良い稜線を数日かけて縦走する。雄大な北アルプスの稜線や遠く聳える南アルプスや富士山など圧倒的スケールの眺望を満喫する。
- 日本アルプスの山々への挑戦を通じて人生に向き合ったり、生きている意味を考えるきっかけを得る。
- 目の前に広がる雄大な景色について、その成り立ちを知ること、壮大な大地の営みを感じる。
- 3,000m級の稜線や湿原など絶好のロケーションでの宿泊を満喫する。
- 春夏秋冬に登山し、それぞれに異なる表情を見せる景色を楽しむ。
(冬山に必要なスキルと装備を備えた上で) 冬の北アルプスの厳しく神秘的な景観に出会う。
- 北アルプスの登山文化を支えてきた山小屋の歴史や苦労に思いをはせる。過酷な自然環境の限られた資源だからこそ利用サービスも含め山小屋で過ごす特別な時間を楽しむ。
- 縦走登山だけでなく、山小屋に連泊して、周辺を散策したり、高山植物や山々の眺めを楽しみながら、のんびり過ごす。
- 入山時のレクチャーやガイドの解説等を通じて、貴重な自然環境が保全されていることや保全の仕組み、日本の登山文化発祥の地としての歴史などを学び、槍穂高連峰等の山岳エリアに関する理解が深まる。
- 登山者が自ら楽しんだフィールドについて、その保全のための取組に参加・協力する。
- あこがれの北アルプス登山に向けて、事前準備（情報収集、計画、トレーニング）をしっかりと行って入山する。そのこと自体が登山の楽しみ・満足として感じられている。

<登山初心者>

- 上高地～岳沢小屋や潤沢、焼岳、蝶ヶ岳、新穂高温泉～わさび平や鏡平、弓折岳、双六岳、西穂高岳など比較的容易なルートの登山を通じて、槍・穂高連峰の素晴らしい景色に出会い登山の魅力を知る。そのことで、次に登りたい山が見つかるなど、段階的に登山のスキルを高め、山の楽しみ方を増やしていく。

Ⅲ. 山岳エリアならではの体験ストーリー

<カード一覧>

カテゴリー	番号	カード	ジャンル	旅行者分類					
				ST	RV	WB	ET	FR	SI
日本を代表する傑出した山岳景観とその成り立ち	1-①	地質から見る槍穂高の生い立ち	NE				●		●
	1-②	氷河が削り出した槍ヶ岳、穂高岳の雄姿	NE				●		●
	1-③	標高差がもたらす植生の垂直変化	NE				●		●
	1-④	積雪深の影響を強く受ける高山植物	NE				●		●
	1-⑤	魅惑の高山蝶	NE				●		●
近代登山発祥の地「アルピニストの聖地」	2-①	播隆上人による槍ヶ岳開山	CA				●		
	2-②	杣人、猟師であり山案内人であった上條嘉門次	CA				●		
	2-③	近代登山の黎明 W.ガウランドとW.ウェストン	SA				●		●
	2-④	戦後登山ブームと小説「氷壁」の世界	SA				●		●
登山文化を支える山小屋	3-①	進取の精神が成し遂げた 100 年前の山小屋開拓	CA				●		
	3-②	個性豊かな山小屋～山小屋で過ごす価値～	CA				●	●	
	3-③	登山道の成り立ちと、これからの維持管理	SA				●		●

■ジャンルの軸

- ・ Nature&Ecosystem&Conservation (NE) …自然探勝、動植物観察、マイカー規制など自然と人の共生に係る保全の取組など
- ・ Culture&Art (CA) …食文化、生活などの異文化体験、伝統工芸や芸術作品等の鑑賞、歴史探勝、地域の歴史や文化を守るための取組など
- ・ Wellness&Spiritual (WS) …温泉、リトリート体験、リフレッシュなど
- ・ Sports&Activity (SA) …登山、ロングトレイル、スキー、キャンプなど

■旅行者分類

- ・ Sightseeing Tourist (ST) …有名観光地を巡る一般的な旅行者。色々な国や地域に行ってみたい層。
- ・ Resort Vacationer (RV) …海山川などのリゾート地を目指すバケーション旅行者。
- ・ Wander Backpacker (WB) …世界中を放浪するバックパッカー旅行者。
- ・ Educated Traveller (ET) …異文化好奇心を持つ旅慣れた知的旅行者。
- ・ FR Visitor (FR) …南部地域のリピーター、親戚や友人等の訪問を目的とする VFR 旅行者。
- ・ Special Interest Hunter (SI) …特定の趣味を旅の主目的とする旅行者。

山岳エリアならではの価値・魅力 1

日本を代表する傑出した山岳景観とその成り立ち

槍・穂高連峰は標高 3,190m の奥穂高岳を最高峰に、槍ヶ岳、南岳、涸沢岳等 3,000m 級の山々が連なる日本を代表する山岳地域であり、稜線からは圧巻のパノラマ景観を望むことが出来る。

また、涸沢の圏谷（カール）や槍沢の U 字谷等の氷河地形が随所で見られ、迫力のある岩峰や雪渓、高山植物群落等があいまって季節ごとに優れた山岳景観を呈している。また、ライチョウ、カモシカ等をはじめ野生動物も豊富にみられる。

息を飲むような圧倒的な眺望、ライチョウや高山植物との出会いなどは、登山を経なければ味わうことのできない体験である。さらに、造山から氷河による浸食まで、その風景の成り立ちを知ること、ダイナミックな大地の営みを感じることができる。

1-①：地質から見る槍穂高の生い立ち

1-②：氷河が削り出した槍ヶ岳、穂高岳の雄姿

1-③：標高差がもたらす植生の垂直変化

1-④：積雪深の影響を強く受ける高山植物

1-⑤：魅惑の高山蝶

1-①：地質から見る槍穂高の生い立ち

槍穂高連峰の山々は、出来た年代や出来方により大まかには以下4つのステージに分けられる。

【ステージ①約1億5000万年前～】土台をなす砂岩・泥岩などの堆積物：蝶ヶ岳から徳本峠周辺

【ステージ②約6400万年前～】常念岳・燕岳や屏風岩をつくる花崗岩

【ステージ③約176万年前～】槍穂高連峰をつくる火山岩

【ステージ④約12万年前～】現役活動中の焼岳火山群

これらの地質の違いは、例えば山並みを遠望することや登山道の色や岩石などの観察からうかがい知ることが出来る。特に、槍穂高連峰は世界的に見ても非常に新しい山脈であり、その形成過程の証拠を豊富に観察できることが大きな特徴である。槍穂高は約176万年前のカルデラ火山によってその原形が形成された。この噴火の際に噴出した火山灰等は堆積して「溶結凝灰岩」となり、地中に残ったマグマは冷えて固まり「滝谷花崗閃緑岩」となった。その後、東西に圧縮された力が働くようになり、東に傾きながら隆起していく。現在の槍の穂先が東に傾いているのはこの隆起が要因である。

また、この隆起は地下深くにあった「滝谷花崗閃緑岩」を露出させた。滝谷花崗閃緑岩は世界で最も若い花崗岩（通称：花崗岩ベイビー）の一つであり、槍穂高連峰の急速な隆起を示す証拠でもある。



東に傾く槍の穂先 槍ヶ岳の先端は東に20度ほど傾いてお辞儀をしたようになっている。これは北アルプスが急速に上昇した際に信州側に傾いて隆起した傾動運動を示すものである。

西穂高岳稜線で見える地質の変化 新穂高ロープウェイ山頂駅にて西穂高岳から丸山への稜線の連なりを見ると、西穂高岳から独標付近まではギザギザの険しい岩稜で、そこから丸山まではなだらかな地形になっていることが分かる。これは岩石の違いによるもので、険しい岩稜が「溶結凝灰岩」からなる地形、なだらかな山稜が「滝谷花崗閃緑岩」からなる地形である。

1-②：氷河が削り出した槍ヶ岳、穂高岳の雄姿

どこから見ても分かる槍ヶ岳の山容や、涸沢カールと山々のコントラストは唯一無二の景観であり登山者の憧れでもある。

槍穂高連峰は約 176 万年前のカルデラ火山で、それが 6 万年前以降の氷期に発達した氷河によって削られて、今の姿が出来上がっている。槍ヶ岳は山頂周囲を 4 方向から氷河によって削られて形成されており、「氷河尖峰（ホルン）」の代表例といえる。山頂から四方に伸びる尾根は氷河が両側から山腹を削ったもので「氷食山稜（アレート）」といって非常に急峻になっているため、槍ヶ岳周辺では「鎌尾根」と呼ばれる。周辺では、日本一美しいともいわれるババ平の U 字谷地形、氷河が運んだ堆積物（モレーン）など氷河の痕跡を随所で観察できる。

涸沢ではスプーンで削ったような斜面がいくつもみられるが、それぞれが氷河が削ったカール（圈谷）で、日本最大規模を誇る。

険しい西鎌尾根と打って変わって、近くに位置する双六岳の東側には広大な平坦地が広がるが、これも山頂氷帽という氷河地形と考えられている。険しい氷河地形が多く見られる中で、双六岳のなだらかな稜線は周囲との地質の違いによるものと考えられている。



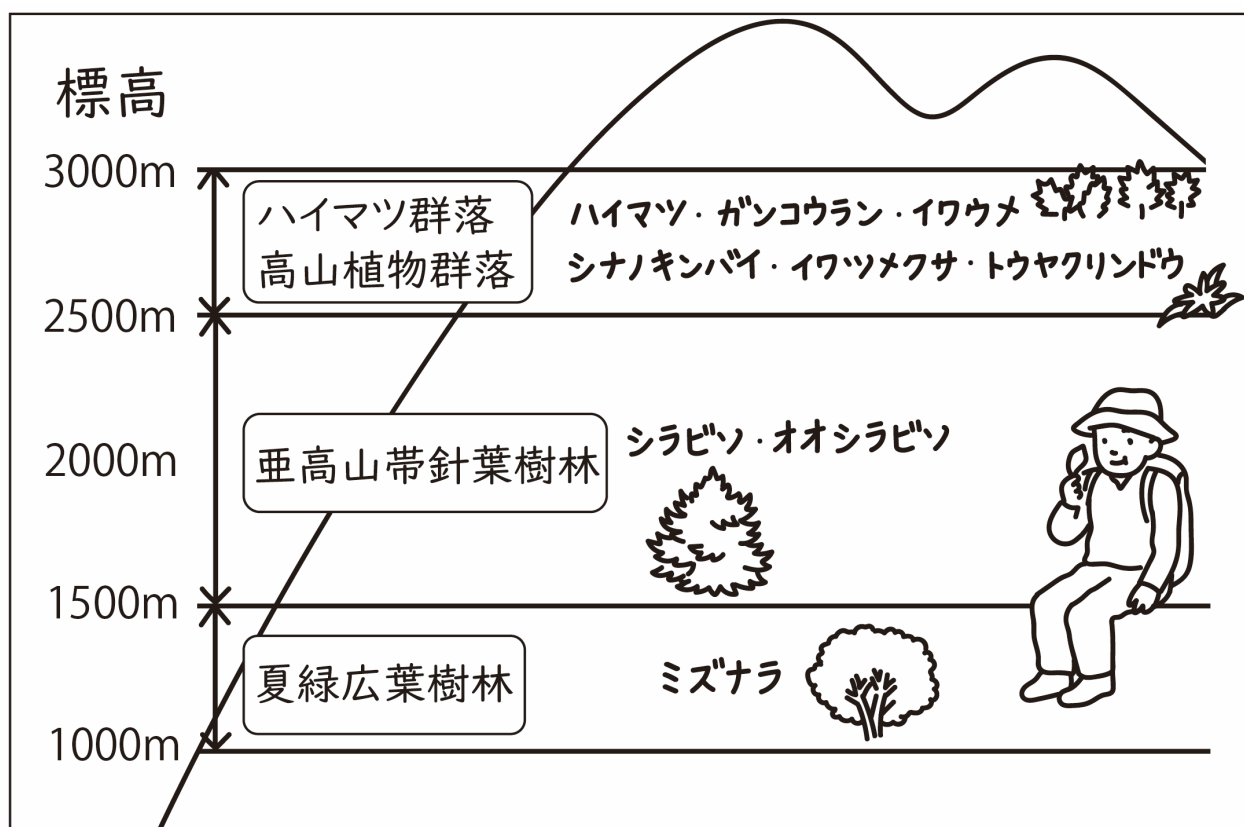
涸沢カール 涸沢ヒュッテ等からは、カール外縁である前穂高岳、奥穂高岳、涸沢岳、北穂高岳の切り立った岩壁からなる迫力ある景観を体感できる。また、涸沢小屋等の北穂高岳側に登ると、典型的な氷食山稜（アレート）である前穂北尾根を良く見ることが出来る。

氷河公園 氷河が岩の表面を削った痕である「擦痕」、氷河が地面を掘りこんで作った天狗池、氷河が運んできた巨岩など、氷河の痕跡をたくさん観察できる。条件が良ければ天狗池に映る槍ヶ岳（逆さ槍）を見ることが出来る。

1-③：標高差がもたらす植生の垂直変化

急峻な山岳地であることから、大きな標高差と様々な地形が存在し、そこに変化に富んだ自然環境が形成されている。植生は標高に応じて多様な変化が見られ、標高 2,500m から 3,000m にかけては、ハイマツ群落（ハイマツ、ガンコウラン、イワウメ等）と高山植物群落（シナノキンバイ、イワツメクサ、トウヤクリンドウ等）が広がり、標高 1,500m から 2,500m にかけては、シラビソ、オオシラビソが優占する亜高山帯針葉樹林、標高 1,000m から 1,500m では、ミズナラ、ブナを主とする夏緑広葉樹林が分布している。

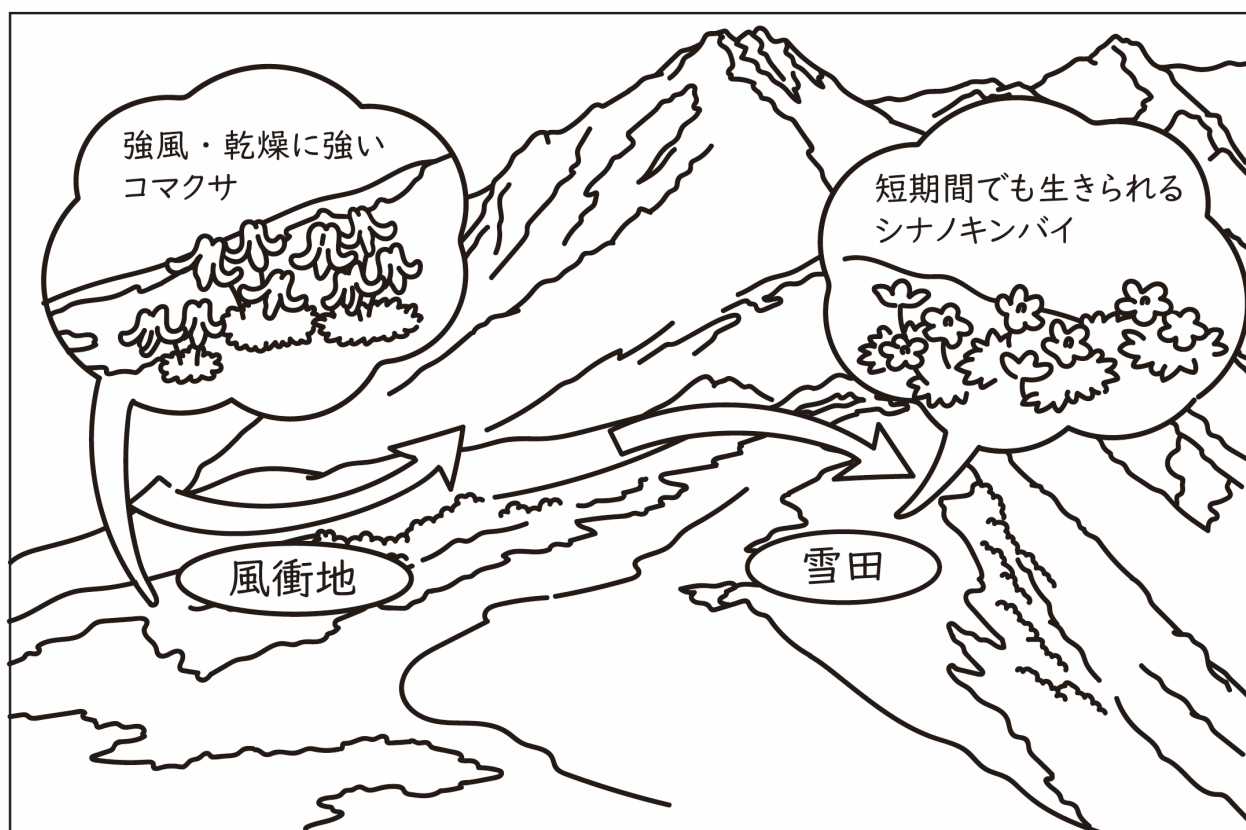
登山の際に周辺をみると、登り始めはブナ・ミズナラからなる明るい林内、その後シラビソ等からなる暗い林内の亜高山帯を登り、急に高木が無くなって高山帯に至る。この亜高山帯と高山帯の境界は「森林限界」とよばれ、それ以上の標高では高木が生長できないため、視界が突然開け、ハイマツや高山植物などの高山帯の植生が目の前に広がる。



蝶ヶ岳横尾ルートの森林限界 登山では標高とともに変化する植生を楽しむことができる。例えば、蝶ヶ岳横尾ルートを登っていくと、針葉樹の林を抜けた途端に背丈の低いハイマツなどの高山帯の植生が広がる。さらに、視界を遮るものが無くなって槍穂高連峰の圧巻のパノラマ景観を目の当たりにすることができるなど、「森林限界」を分かりやすく体験することができる。

1-④：積雪深の影響を強く受ける高山植物

本地域では、涸沢や岳沢をはじめ多くの場所で高山植物が咲き乱れるお花畑がみられる。本地域は地殻変動、火山活動、氷河の影響を受けて、複雑な地質と地形を有している。この岩の違いは、多様な土壌を形成し、そこに生育する高山植物の種類に強く影響する。そして、高山植物の分布に最も強い影響を及ぼしているのが積雪分布と考えられている。複雑な山岳地形は、風衝地から雪田まで、積雪深の場所による著しい違いを作り出し、この不均一性が高山植物群落の多様性に強く関係している。風衝地には強風や乾燥に耐える植物が分布し、雪解けの遅い雪田には短期間で生きていける植物が分布する。風衝地を好む植物とはコマクサ、トウヤクリンドウ等がみられ、雪田を好む植物としてはシナノキンバイ、コバイケイソウなどがみられる。



花の百名山 山と花を愛した作家田中澄江が訪れた山々の歴史とそこで出会った花との思い出を綴ったもので、「花の百名山」「新・花の百名山」で、それぞれ 100 座が選定されている。本地域の高山植物としては槍ヶ岳のトウヤクリンドウ、双六岳のコバイケイソウ、弓折岳のムシトリスミレ、笠ヶ岳のシナノキンバイなどが紹介されており、登山計画のヒントにもできる。

1-⑤：魅惑の高山蝶

高山蝶は、本州中部以北の高山およびその近傍の溪谷、高原などに限って分布する蝶類である。氷河期に大陸から日本へと分布を広げたものが温暖化に伴い寒冷な高山で生き残ったものと考えられている。厳しい環境に対応するために平地の蝶とは違った特徴を持つものも見られる。本地域には特筆すべき高山蝶等としては、タカネキマダラセセリ、ミヤマモンキチョウ、クモツツマキチョウ、オオイチモンジ、コヒオドシ、ベニヒカゲ、クモマベニヒカゲ、タカネヒカゲ、ヤリガタケシジミ等が生息している。それぞれ翅の色彩も模様も様々であり、羽を休めているときに観察してみると面白い。

高山蝶類は、成虫になるまでに数年を要すること、食草が限られていることから、餌となる植物の減少が生息数の減少につながりやすいなど、生息環境の変化の影響を受けやすい生き物である。現在、食草の踏み荒らし、採取や温暖化等による減少など、生息環境の変化が懸念されている。



山岳エリアならではの価値・魅力 2

近代登山発祥の地～アルピニストの聖地～

江戸時代には播隆上人が笠ヶ岳再興、槍ヶ岳開山を行うなど、山岳信仰の対象とされるとともに、豊かな木材を切り出すために杣人が山深くまで分け入っていた。

明治時代にはW.ガウランドにより飛騨山脈がジャパニーズ・アルプス（日本アルプス）と名付けられ、W.ウェストンにより広く世界に紹介され、日本の近代登山の幕開けとなった。

山岳エリアでは登山を楽しむとともに、山岳信仰やレジャー登山の歴史、自然と密接に関わってきた暮らしなどを知ること、日本人が山とともに共生してきたことで享受してきた喜びや恵みに触れることもできる。

2-①：播隆上人による槍ヶ岳開山

2-②：杣人、猟師であり山案内人であった上條嘉門次

2-③：近代登山の黎明 W.ガウランドとW.ウェストン

2-④：戦後登山ブームと小説「氷壁」の世界

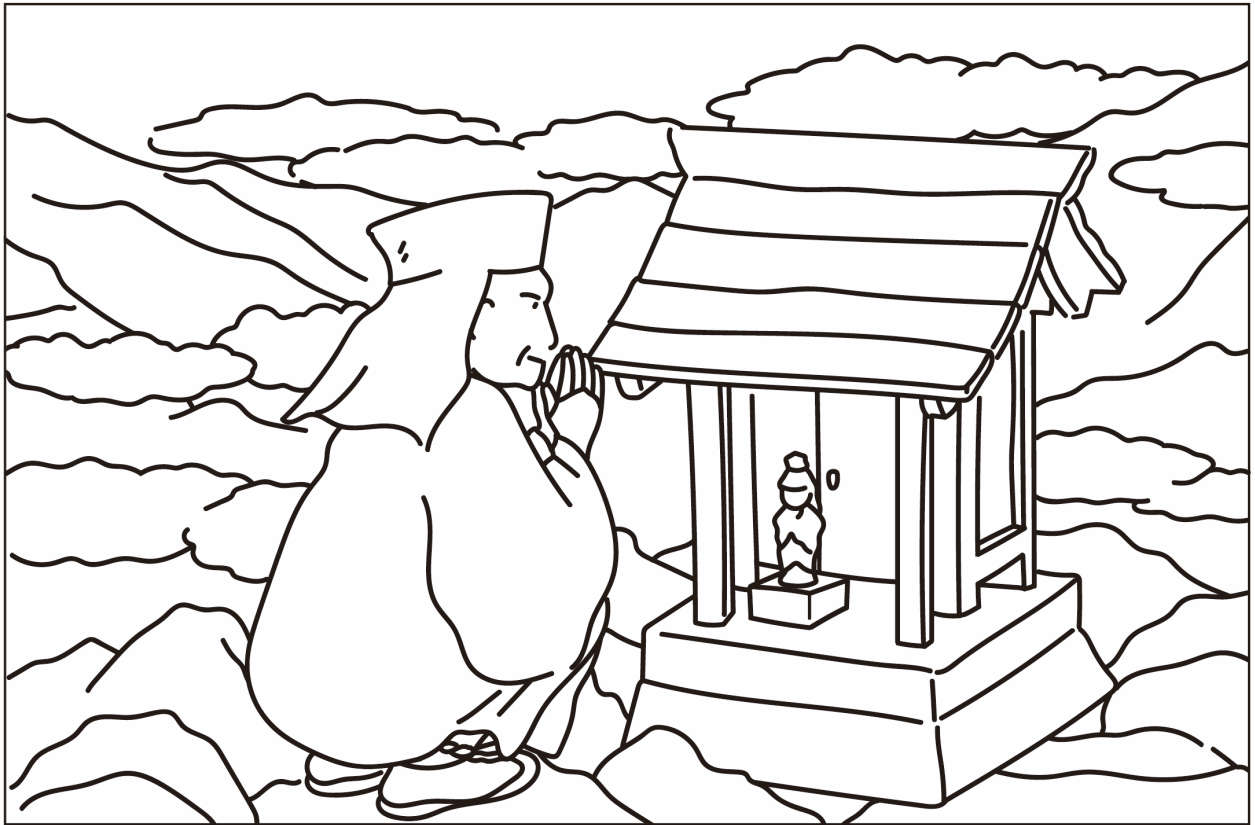
2-①：播隆上人による槍ヶ岳開山

江戸後期の僧侶である播隆上人は修行の場を山岳に求め、各地の山で念仏修行を行った。文政6(1823)年に笠ヶ岳に登ると登山道を整備し、この山を再興した。

文政11(1828)年に槍ヶ岳を開山。合計五回の槍ヶ岳登山で山頂に仏像を安置するだけでなく、山頂付近に「善の綱(善所に導く綱という意味)」を設置し登拝者の安全の確保を図ったことから「槍ヶ岳開山」と称されている。

これはW.ウェストンの登頂の66年前のことで、近代登山以前にも播隆上人に導かれた多くの日本人が槍ヶ岳に登拝していた。

開山の歴史に思いをはせながら、山頂を目指すことで登山の魅力がより豊かなものになると考えられる。



槍ヶ岳播隆窟 槍ヶ岳の槍沢登山道沿いの岩小屋は、播隆上人が槍ヶ岳に登る際に利用していたことから播隆窟と呼ばれている。播隆上人はこの岩小屋に参籠し念仏を唱えていた。

笠ヶ岳播隆平 笠ヶ岳東面の平坦地は、笠ヶ岳を再興した播隆上人にちなみ、播隆平と名付けられている。

2-②：杣人、猟師であり山案内人であった上條嘉門次

上條嘉門次は江戸時代末期に当時杣人の集落であった稲核で生まれ、若くして杣として上高地に入る。その後は猟を生活の中心に据え、夏にイワナ、冬にカモシカ、クマなどを獲って生活した。

W.ウェストン夫妻の山案内を行い、ウェストンの著書の中で、抜群の案内人として紹介されると一躍有名になった。また、嘉門次の山での経験と知識は、陸地測量部の三角点建設や山林局の境界測量の際にも必要とされ、陸地測量部による前穂高の初登頂などは嘉門次の案内に導かれたものである。現在の山岳ガイドのはしりともいえる存在である。明神池の畔に建てた小屋は、のちに嘉門次小屋と呼ばれることになった。

嘉門次の生業（きこり、マタギ）は、現在では失われつつある、自然と密接に関わる暮らし方を再確認する機会にもなると考えられる。



2-③：近代登山の黎明 W.ガウランドとW.ウェストン

明治時代に、日本で初めて西洋式登山を行ったといわれるのは、大阪造幣寮のお雇い外国人として来日したイギリス人技術者のW.ガウランドである。飛騨・信州の山岳地帯を最初に探検したヨーロッパ人であり、地質学や考古学上の調査を行っている。明治10（1877）年には外国人として初めて槍ヶ岳に登っている。ジャパニーズ・アルプスの命名者としても知られ、日本の山々の美しさを海外に紹介するきっかけをつくった。

それまでの宗教登山、狩猟、地質調査、測量登山などと異なり、登山それ自体を楽しむことを目的とした近代登山を槍穂高連峰で実践したのは、イギリス人宣教師であるW.ウェストンである。その著書『日本アルプスの登山と探検』により、広く世界に紹介された。明治24（1891）年に初めて上高地を訪れたときのルートは、島々から徳本峠を越えて明神に至る道であり、翌年には槍ヶ岳登頂も果たしている。

ウェストンのアドバイスを受けた登山家である小島鳥水らは山岳会（後の日本山岳会）を設立するなど、スポーツとしての登山が浸透していく。高等学校や大学等の学校に山岳部ができ、日本アルプスの主峰への初登頂が競われた。その後、大正10（1921）年にアイガー東山稜の初登攀に成功した槇有恒によってもたらされたヨーロッパの本格的登山技術は、草鞋と金剛杖といった在来の登山方式を一変させた。前衛的な学生登山者による岩登りや積雪期登山が槍穂高連峰を中心に展開されていく。

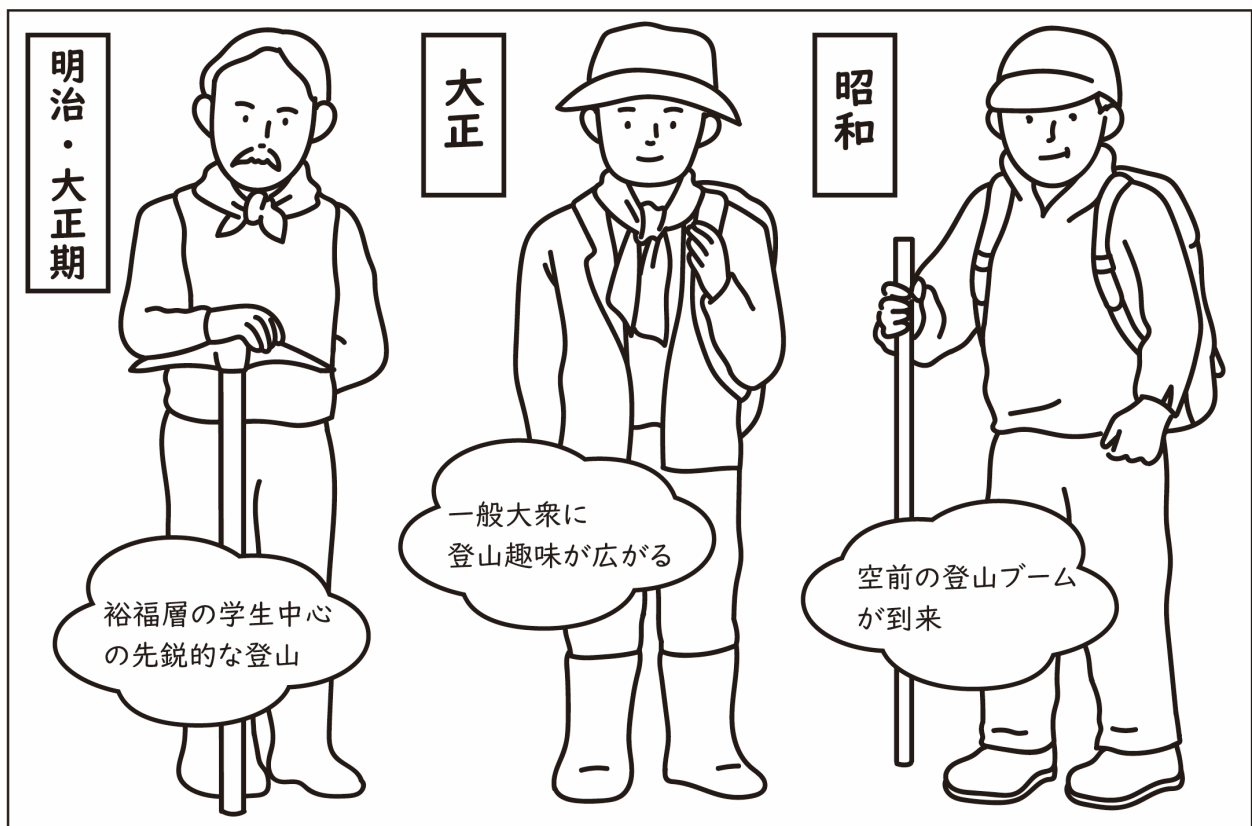


徳本峠 上高地までの車道が無かった時代に、島々から徳本峠を越え上高地に至る道が良く利用されていた。W.ウェストン、高村光太郎や芥川龍之介なども利用したクラシックルートに位置する。徳本峠からのぞむ穂高連峰の眺望が素晴らしい。

2-④：戦後登山ブームと小説「氷壁」の世界

明治・大正期には有産者階級や裕福な家に育った学生を中心に先鋭的な登山が進展してきたが、大正期に入ると登山道や山小屋の開設、公共交通機関の発達、ガイドブックの充実、山案内人の組織化等による現地受け入れ態勢の拡充と相まって一般大衆にも登山趣味が広がっていった（大正登山ブーム）。

戦後、経済復興が進む中、昭和 31（1956）年の日本山岳会によるマナスル登頂などを契機に空前の登山ブームが起き、多くの人々が山に向かった。この時代の若者が山に熱量を傾けた様子は、前穂高岳東壁で起きたナイロン・ザイル切断事件を取り上げた井上靖の小説「氷壁」にも描かれており、「氷壁」もまた登山ブームの火付け役の一翼を担った。



氷壁の舞台、前穂東壁 前穂高岳の東壁はかつてクライマー達が情熱を傾けて挑戦した岩壁であり、徳沢から横尾までの間を歩きながら、その迫力ある岩壁を見ることが出来る。

山岳エリアならではの価値・魅力 3

登山文化を支える山小屋

日本を代表する傑出した山岳景観を要する本地域は国内トップクラスの人気を誇る本格的な登山エリアとなっている。

本地域は世界でも有数の山小屋が密集する地域と言われており、山頂付近や稜線部などの奥深い山域にも数多くの山小屋が存在している。また、本山域には多様な登山ルートが整備されており、全国から多くの登山者が訪れている。

山小屋は、厳しい自然環境下で制約の多い中、登山者に宿泊や食事といったサービスを提供することに加え、登山道の維持作業、登山者への情報提供・指導、遭難救助、トイレや水の提供など、山岳地の環境保全と安全登山を支える上で重要な役割を果たしている。

3-①：進取の精神が成し遂げた 100 年前の山小屋開拓

3-②：個性豊かな山小屋～山小屋で過ごす価値～

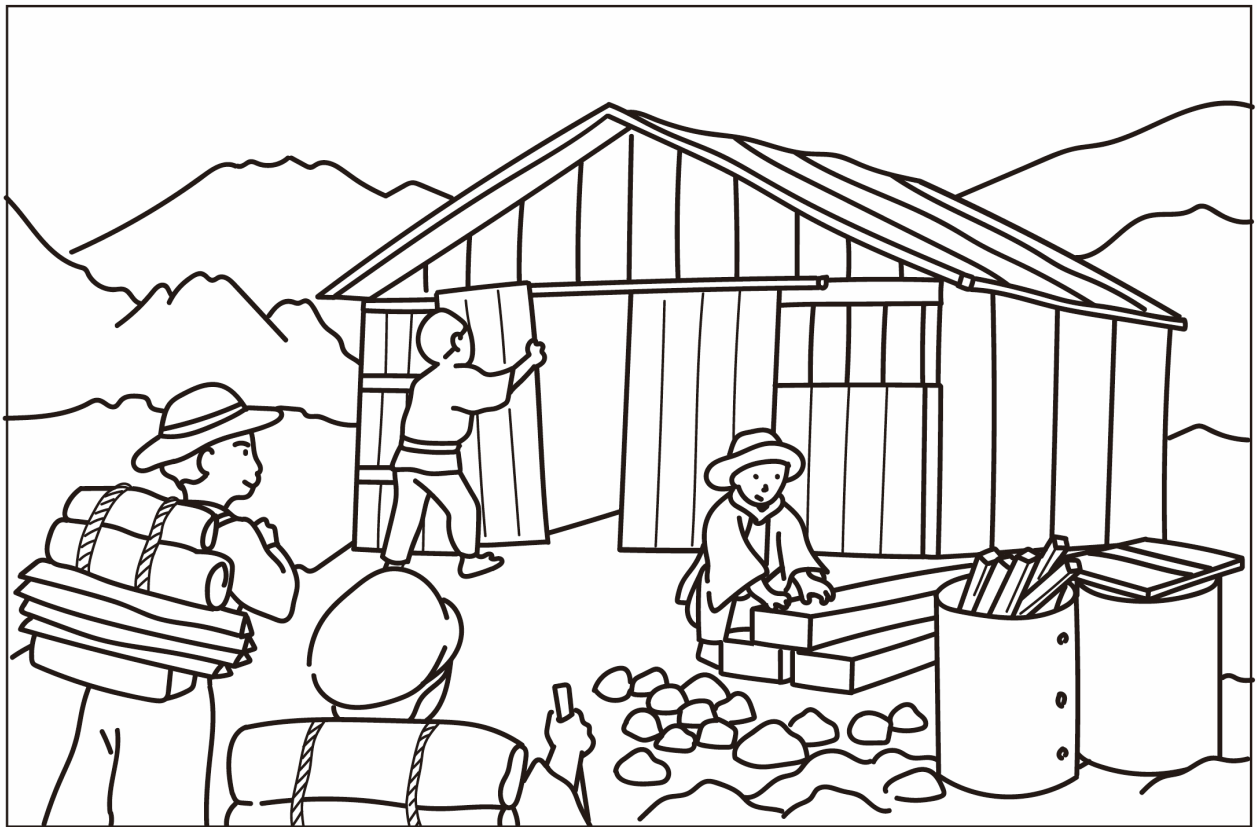
3-③：登山道の成り立ちと、これからの維持管理

3-①：進取の精神が成し遂げた 100 年前の山小屋開拓

大正6（1917）年、穂苅三寿雄は、山田利一（のちの常念小屋創業者）らとともに、北アルプス南部初の営業小屋として「アルプス旅館」（のちの槍沢小屋。現・槍沢ロッヂ）を建設。その後、大正末期までに燕の小屋（現燕山荘）、穂高小屋（現穂高岳山荘）、槍ヶ岳肩ノ小屋（現・槍ヶ岳山荘）などが開業した。現在の主要な山小屋は大正の登山ブームの際に開業したものが多い。

厳しい気象条件での建物の建設・維持、資金の確保、経営の不安定さなど、幾多の苦難に見舞われつつも、当時の開拓者が**進取の精神**で乗り越えてきたものと考えられる。

開業以来、数代にわたって家族経営を続けている山小屋が多く、開拓時の思いや小屋毎の歴史、山小屋主人の考えが小屋の個性・魅力となっている。それぞれの小屋のルーツに思いをはせて宿泊することは登山の魅力の一つである。



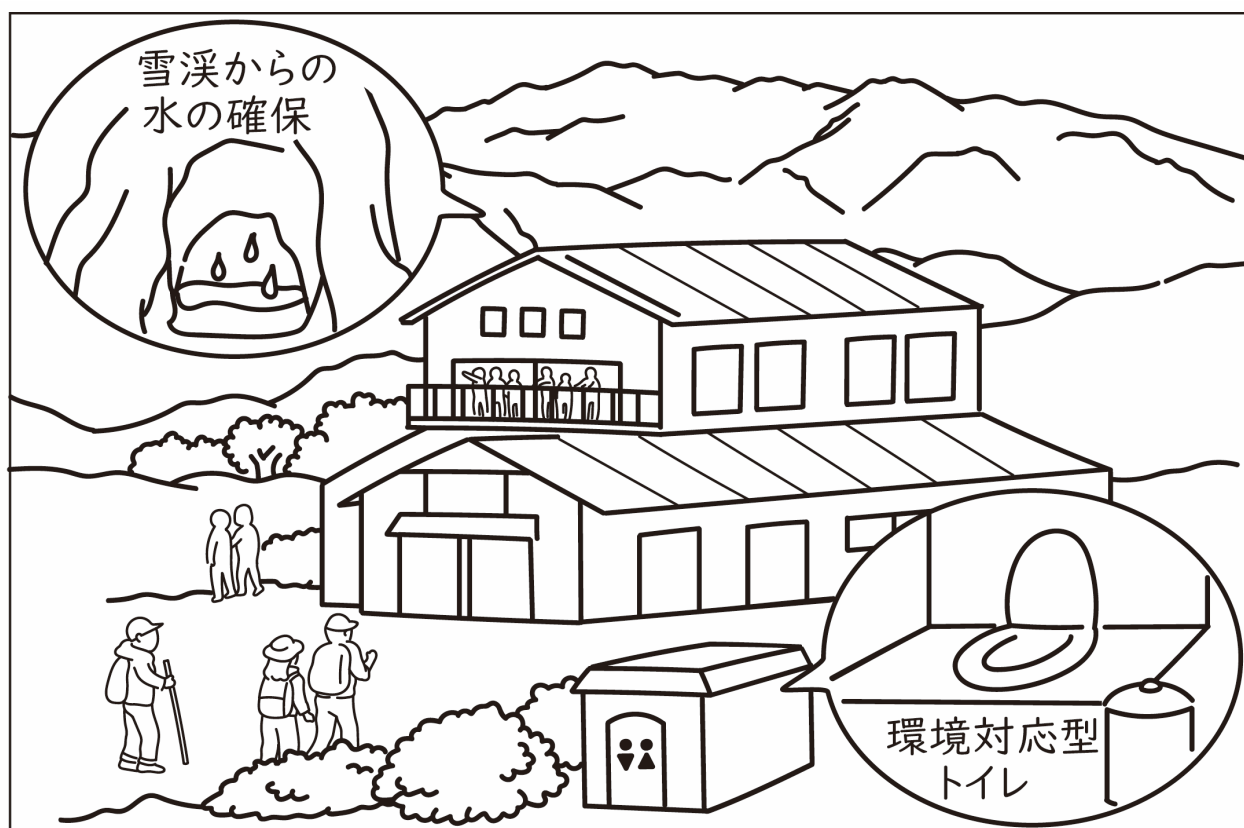
3-②：個性豊かな山小屋～山小屋で過ごす価値～

本地域の山小屋は、稜線・山腹・山麓など様々な立地に位置し、小屋周辺の環境も岩稜、森林、溪流、湿原など多岐にわたる。様々なロケーションに位置する山小屋では、それぞれの環境に応じた魅力・楽しみ方と制約があり、提供できるサービスも異なる。

例えば稜線の山小屋では、周辺の山々が全て見えるようなパノラマ景観や、モルゲンロート、雲海、夕陽といった絶景を楽しむことができ、山腹の山小屋では高山植物や山々の眺めを楽しみながら、のんびり過ごすような楽しみ方もできる。

水道や商用電源、道路といったインフラの無い山小屋においては、水や電気が非常に貴重であり、自然エネルギーの活用、天水や雪渓等からの水の確保、環境配慮型トイレの設置など、登山者の安全や利便性の向上のため先進的な技術の導入も含めて、山小屋の経営に様々な努力・工夫がなされている。また、険しく土地が限られる立地においても利用者が過ごしやすいよう建物の空間演出等への工夫もみられる。さらに、安全確保や充実した登山のために、お天気案内や注意すべきポイントを解説する小屋、登山者同士の交流を大切にしている小屋など、小屋毎に様々な取組が行われている。

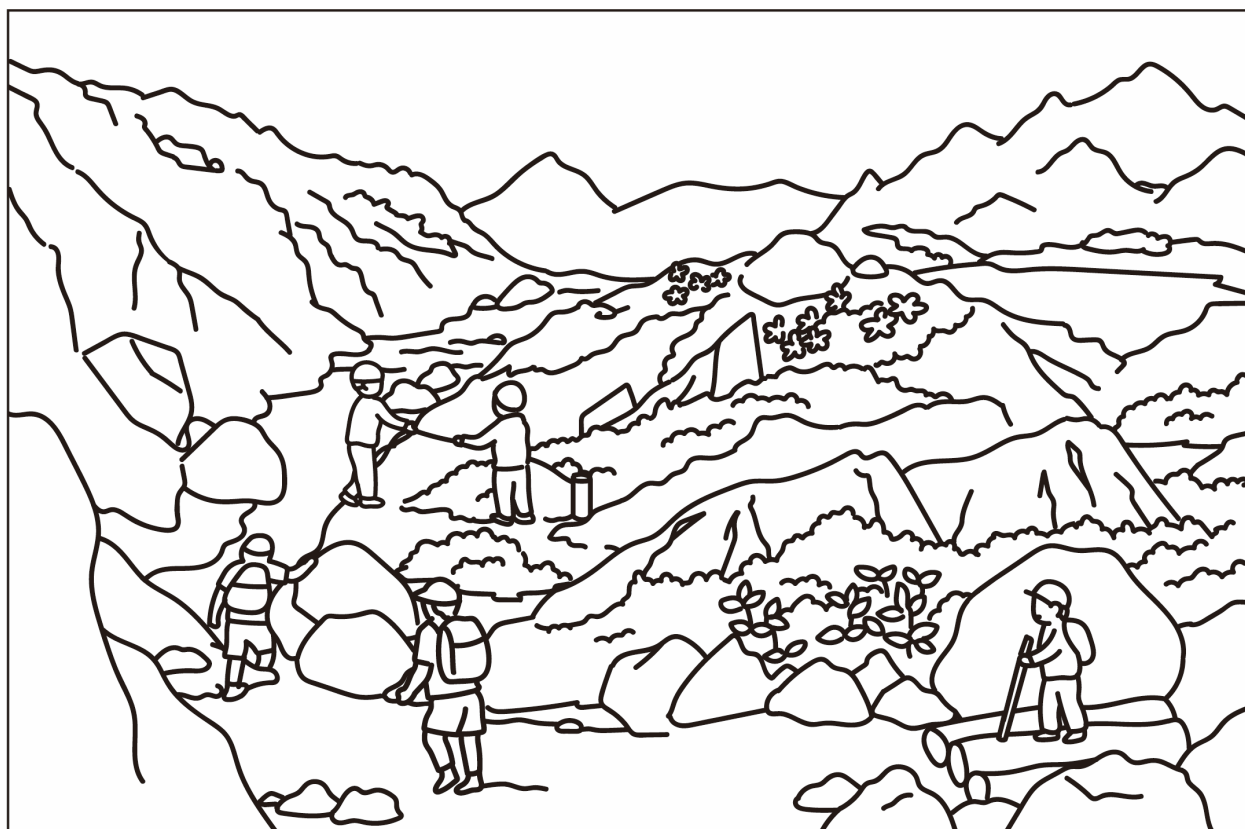
北アルプスの登山文化を支えてきた山小屋の歴史や苦勞に思いをはせ、過酷な自然環境の限られた資源だからこそ利用サービスも含め山小屋で過ごす特別な時間を楽しむことや、閑散期などに山小屋主人の講和を聞いたりスタッフと交流したりすることは、登山者にとって貴重な体験となる。



3-③：登山道の成り立ちと、これからの維持管理

近代以前の登山道は、猟師・釣師や樵、修験者や登拝者などが奥山へ通った道であった。明治時代の終わり頃から大正時代にかけて、登山者の増加に伴い山小屋や登山道が整備された。大正期の槍ヶ岳登山は中房を起点とする場合が多かった。当初の登路は大天井岳から東天井岳を経て槍沢に下り、そこから登り返すものであり沿線には槍沢小屋や一の俣小屋が誕生した。大正 9（1920）年に大天井岳から槍ヶ岳へ至る東鎌尾根を辿る「喜作新道」が開かれると槍ヶ岳への行程は大幅に短縮された。喜作新道の開削を担ったのは猟師であり山岳ガイドも務めた小林喜作であった。喜作は大正 11（1922）年には殺生小屋（現殺生ヒュッテ）を開業している。その後も旧来の登山道とは別に新しい登山道が拓かれるようになった。岳沢から前穂高岳までの直登ルートである「重太郎新道」は、穂高小屋を設立した今田重太郎が昭和 26（1951）年に完成させた。こうした登山道の開発により登山ルートのバリエーションが豊富となり、槍・穂高連峰周辺の山々を国内屈指の登山の人気エリアへと押し上げる要因となった。

現在の登山道は、山小屋を中心とした関係者の労力と資金、それらを支援する行政の取組によって維持されている。近年、物価、人件費等の上昇や登山道被害の増加など、社会環境、自然環境の変化により、これまでの枠組で登山道を維持し続けることが難しくなっていることから、利用者に登山道を含む山岳利用環境の現状を正しく伝えとともに、利用者からの協力や参加により登山道を維持していく取組として「北アルプストレイルプログラム」が実施されている。



北アルプストレイルプログラム 持続的な登山道維持を実現するために、「登山道維持の現状を知る」「登山道に優しい登り方を心がける」「ルールやマナーの遵守、安全登山を心がける」「登山道維持のための協力金の支払い」「登山道整備イベントへの参加」「登山道の状況報告・共有」等の多様な参加方法を通して、登山者も一緒になって登山道維持を図る取組。

Kita Alps Traverse Route

「Kita Alps Traverse Route」ならではの体験ストーリー集 -山岳エリア編-

2025 年 3 月

環境省信越自然環境事務所 中部山岳国立公園管理事務所

〒390-1501 長野県松本市安曇 124-7

TEL 0263-94-2024

FAX 0263-94-2651